

## 日本版 Learning Stories（保育者版・保護者版）の モデル開発とアクションリサーチ

小泉 裕子（児童学科・教授）・佐藤 康富（初等教育学科・教授）  
関川 満美（初等教育学科・講師）・真宮 美奈子（児童学科・准教授）  
森本 壽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）・上田 陽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）  
塚田 菜絵（東戸塚保育園・保育士）

### （研究の背景）

筆者等、鎌倉女子大学の幼児教育研究グループの研究テーマは、近年、世界の幼児教育・保育に注目してきた（佐藤・小泉他2015～）。なぜならば、EU 諸国や OECD 加盟国を中心に、二十世紀末から幼児教育・保育の制度改革や質の改善に取り組み、生涯学習の基盤としての幼児教育の国家的整備が重要であるという気運が高まっており、我が国の幼児教育の動向もその影響を受けて、制度改革等が行われているからである。

2001年 OECD 報告“Starting Strong”、2006年の“Starting Strong II”の中では、21世紀の人的資本の視点から生涯学習の第一段階としての Early Childhood Education and Care (ECEC) への期待に対し強く提言されており（泉2008）、我が国の乳幼児教育・保育改革も OECD 加盟諸国の研究動向を反映された改革が行われ、先の幼稚園教育要領等の改定（2017）の骨子へと繋がっていると言える。

新幼稚園教育要領等の改定では、生涯学習の基盤としての乳幼児教育において、集団教育の場でどのような能力を育てるべきであることを明示している。そこで取り上げられているキーワードは、知的なスキルと共に社会情動的スキル（非認知的スキル、ソフトスキル、性格スキル等）であり、「学びに向かう姿勢」の素地を育てるとして大変注目されている。

乳幼児教育における非認知的スキルや性格スキルの育成に注目したのは、経済学者ヘックマンの研究に端を発すると言っても過言ではない。彼の研究は、アメリカにおける長期にわたる縦断的研究の成果を発表した「ペリー就学前プロジェクト」に依拠するもので、エビデンスを元に幼稚園教育（幼児教育）の効果を示したものである。この研究では、幼稚園で教育を受けた子どもと、全く受けなかった子どもを追跡調査した結果を報告しており、幼稚園の教育が子どもの発達や成長に果たす役割の大きさを強調したといえる。

さらに現在 OECD Starting Strong VI Phase12-17-2018で 世界的に注目されているのは、質の高い幼児教育である。子どもの成長発達を保証するためのプロセスの質（例；保育者と子どもとの関わり、子ども同士の関わり、子どもと周りの環境との関わり、子どもと親との関わり、保育者と親との関わり）と構造的な質（例；保育者と子どもの割合、集団の大きさ、保育者の養成育成過程、研修の条件や内容、資格の条件やレベル）を双方向的に考えることである（Taguma 2018）としている。

筆者等は、この世界動向の中で、OECD で最も注目されたニュージーランド（＝以下 NZ と記す）の ECEC 改革を取り上げ、とりわけ乳幼児教育のプロセスの質に取り組み、子どもの発達の指標としての「子どもの学びの物語（“Learning Stories”）」の成果に注目

し研究を深めてきた。

## I 研究の目的

筆者等の NZ の保育研究（2015年-2017年）では、『幼児の学びをアセスメントするための指標構築に関する研究』（佐藤・小泉他2017）を行い、NZ 北島オークランドを中心とした調査を実施した。保育のプロセスの質を論じる際、最も重要であるのは子どもの発達評価（assessment）の内容と方法である。我が国の発達評価は、昭和50年代に注目されたチェックリストによる行動評価法の他、我が国の伝統的な保育日誌法、個人記録、エピソード記録など多岐にわたる。しかし、それらは保育者の記憶をたどって再生する方法であるため、保育者の一方的、主観的な自己評価に陥りやすいと指摘されることも多い。それ故、記録した本人とそれ以外の保育者等（小学校教諭含む）との間で情報共有がしにくい方法であるともいえる。

一方 NZ の発達評価としての“Learning Stories”は、保育者一人一人の保育観によって、記録が多様であって良いが、評価するポイントとして客観的指標が導入されている。「子どもの学び」に注目することだ。Margaret Carr によって開発された保育記録“Learning Stories”は、社会文化的観点から子どもの可能性に焦点を当てて記録・評価（assessment）するものである。すなわち、保育のプロセスの質を高める方法として注目されるものである。

筆者等は、2017年までの基礎的研究を踏まえた結果、“Learning Stories”は、我が国の保育者が待ち望んでいる発達評価（assessment）・保育記録ではないかという確信に至った。しかしながら、“Learning Stories”は、NZ の社会文化的な環境の中で作られたもので、我が国の単一文化的環境下では効果が得られるとは限らない。さらに我が国の130年の歴史を踏まえた幼児教育文化の中では、受容されない懸念さえある。

そこで、筆者は我が国の保育者が、子どもの生活や遊びを通して学ぶ姿を的確に可視化し、日々の保育改善に役立てることのできる日本版“Learning Stories”のモデル開発を行い、現場で汎用性の高いものとなるようアクションリサーチを行うこととした。

特に本稿では、NZ の“Learning Stories”から学んだ視点として、保護者と保育者が同じ観点で子どもの発達を評価する点に注目をしたことも大きな特徴である。我が国の保護者を巻き込んだ実践研究、保護者版“Learning Stories”のモデル開発を行いアクションリサーチを展開し、その効果を検証し論考していく。

後段では、研究を同時進行していた我が国の保育者（佐藤・小泉等の研究に賛同していた幼稚園、保育所の園長等）等による取り組みを紹介し、考察を進めていくこととする。

## II 日本版“Learning Stories”（保育者版・保護者版）のモデル開発と AR 結果

### 1. モデル開発の手続き（保護者版）

日本版“Learning Stories”（保育者版・保護者版）のモデル開発にあたり、筆者はまず始めに、保護者版のモデル開発を行った。数年前より地域子育て支援拠点事業にて、子育て中の保護者を対象とした「子育て支援講座」の講師として支援に携わる中で、育児期の子育て不安の要因として、保護者の子どもの発達評価の問題に注目したからである。

#### （1）NZ の保護者版“Learning Stories”にみる発達評価の取り組み

NZ では、公的保育施設と共に親が運営する Play Centre が 1 割の割合で存在している。

子どもの保育を任せる施設として、NZ 政府より認められているもので有り、そこで保護者は、自らもスタッフの一員として担当する施設である。Play Centre では、他の保育施設同様に、統一カリキュラムである“Te Whariki”に基づいた保育実践を行い、子どもの発達評価としての“Learning Stories”を書くことが求められる。保育者の国家資格に準じた研修を受けることなどが必修となっており、“Learning Stories”を書く目的、方法論なども既習の上、スタッフとして関わっている（2016小泉）。したがって、保護者版“Learning Stories”は、保育者版のそれと同じものである。

## （２）我が国の保護者の発達評価の現状

一方我が国の保護者の現状を振り返ると、保護者自身が子どもの発達評価をする機会はほとんど無い。育児日記は、体温、排泄、食事の様子等、子どもの健康観察を通して書かれる保健記録のようなものが一般的で有り、子どもの心情やスキルに関する発達評価の観点が含まれているとは言えない。すなわち現状では、保護者間における子どもの発達評価は、研修の機会を得ることもなく、私的環境の中、主観的な評価に陥りやすいという問題が顕在する。さらに私的で主観的な評価は、他の子どもと比較したり一般的な子どもの情報に左右されるため、結果の分かることに注目しがちな相対評価に偏りがちであり、子育てで不安や育児ストレス等が増長される要因にもなっている。

## 2. 我が国の保護者を対象としたワークショップの開設とアクションリサーチ

NZ の保護者たちへのインタビュー調査から見てきたこと（2017小泉等）は、保育者と同じ観点で子どもの発達を理解することの重要性である。我が国でも少子化が加速し、平成以降の保育現場では「保育者と保護者の子育てにおけるパートナーシップ」が必須で有り、子どもの発達や学びの情報等を双方で共有しながら、より良い連携を図ることが求められている。しかしながら、今の保育現場では、保育者による保護者への寄り添いと共感が基本で有り、保護者から保育者に歩み寄る視点は抜け落ちてきているのが現状である。そこで筆者は、NZ の Play Centre に観る保護者たちの“Learning Stories”を目標に、地域子育て支援拠点施設に集う保護者に対して、日本版“Learning Stories”のワークショップを開設した。

### （１）倫理的配慮

このワークショップは、筆者の草案である日本版“Learning Stories”（保護者版）として実施するアクションリサーチであることを承諾した Y 市の地域子育て支援拠点事業 N の協力を得て実施すると共に、本研究の趣旨に同意を得られた2016年 6 月から 9 月に参加した 6 名の母親（1 期生）と、2017年 6 月から 9 月に参加し 4 名の母親（2 期生）に対して実施したものである。（鎌倉女子大学倫理委員会承認番号＝鎌倫－15026）

### （２）ワークショップの時期

#### 1) 第 1 期アクションリサーチ：

第 1 回講座（2016年 6 月 X 日、am.10:30～12:00. 拠点事業 N の 1 室にて「1 枚の写真で物語る“Learning Stories”」「成長のプロセスを意識した学びの物語」を講義）

第 2 回講座（2016年 7 月 X 日、am.10:30～12:00. 拠点事業 N の 1 室にて実施。母親たちの作成した「1 枚の写真で物語る“Learning Stories”」のフィードバック。その後「成長のプロセスを意識した学びの物語」を講義）

第3回講座（2016年9月X日、am.10:30～12:00. 拠点事業Nの1室にて「成長のプロセスを意識した学びの物語“Learning Stories”」のフィードバックと講座のまとめ）

## 2) 第2期アクションリサーチ：

第1回講座（2017年6月X日 am.10:30～12:00. 拠点事業Nの1室にて「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」「成長のプロセスを意識した学びの物語」を講義）

第2回講座（2017年7月X日、am.10:30～12:00. 拠点事業Nの1室にて実施。母親たちの作成した「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」のフィードバック。その後「成長のプロセスを意識した学びの物語」を講義）

第3回講座（2016年9月X日、子どもの健康状態の都合で、母親たちそれぞれ個人の都合に合わせた。am.10:30～12:00. 拠点事業Nの1室にて実施。成長のプロセスを意識した学びの物語“Learning Stories”のフィードバックと講座全体のまとめ）

以下の報告は、アクションリサーチに参加する母親たちに、2年間同じ手続きでそれぞれ3回のワークショップを実施した結果をまとめたものである。掲載写真は個人情報保護のため、参加者の特定できないように配慮したものを掲載している。

## （3）第1回ワークショップの内容（2016年6月x日、2017年6月x日）

### 1) 講座のねらいについての周知

地域子育て支援拠点事業に集まる母親たちの多くは、子育て不安を払拭したい、子育てに希望を持ちたいという切なる願いを持って集まっている。この講座の目的として、子育て不安を解消するべく方法、手立ての具体的な提案でなければならない。筆者は、その目的を達成すべく日本版“Learning Stories”（保護者版）を推進するため、参加者に理解してもらうべく、この講座の目的として、まず始めに、我が国の育児期家族に蔓延する子育て不安の現状について解説した。その中で、子育ての不安が誰にでも存在するが、不安が増大し育児ストレスを抱える要因として、「子どもの発達に関する不適切な理解」が存在することを指摘した。

「子どもの発達に関する不適切な理解」として、一般に親は子どもの成長の速度について「早ければ早いほどよい」と考えがちだが、子どもには発達の個人差の存在することを受けとめる大切さを理解するべきであることや、一人一人が異なった様相をたどって良いことを理解していく必要があることを述べた。また、情報化社会の中では不確定な育児情報が氾濫し、根拠なく他の子どもと我が子を比較したり、情報に振り回され一喜一憂することで、不安を増長させてしまう問題を指摘した。

一方、集団保育の中で保育者等が行っている子どもの発達評価のポイントを紹介し、保育者が幼稚園教育要領や保育所保育指針などで目標としている、「一人一人の子どもの発達評価」をするための専門的な姿勢を紹介した。すなわち、子どもの発達を見せかけの結果だけで観るのではなく、心情・意欲・態度を含めた生活の様子や遊びのプロセスを観ていく重要性を強調した。

### 2) ワークショップの課題提供；フィードバックで不安払拭

前段でも記したように、参加する母親たちは、子どもの発達を成長のプロセスで評価しながら記録する取り組みに関して、全くの未経験者である。NZのPlay Centreでは研修コースの中で学修するが、ここでは、研修・学修と言うより、我が国の保護者に馴染めるような方法で導入を図った。



講義では簡単な方法としての「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」、保育者に近づくための「成長のプロセスを意識した学びの物語」の紹介を行った。

次回の講座までに参加者がそれぞれ、課題に添った「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」を作成し持ち寄り、筆者からのフィードバックを得て進めていく方法を取り、途中で書くことに疑問が生じたり不安にならない等配慮した。

### 3) 1枚の写真から物語る我が子の“Learning Stories”作成の方法提供

最初に、日頃撮っている子どもの写真を題材にする方法に挑戦して頂いた。写真の多くは思い出のある場面撮影、記念写真であるが、1枚1枚の写真が子どもの発達記録として価値のあるものへと変えていくための演習を行った。記録として意味のある写真は、子どもの育ちを表すものであり、遊びや生活を通して「学んでいる」ことを証明するエビデンスであることに気づくよう講義した（図2）。さらに保護者らは、子どもの生活や遊びの様子が、「目の前の我が子の発達にふさわしい学び」であるかどうか見極めることが重要であることを以下のように学んだ。

- ・ **WHY**：なぜ「子どもの学びの物語」をつくるのか
- ・ **HOW**：どのように「子どもの学びの物語」を作るのか
- ・ **WHAT**：親力が目指す力とはどのような力なのか

その中で、「子どもの発達が見える写真」を撮るために必要なスキルとして、「写真を撮るタイミング」の重要性を指摘し、Margaret Carr によって NZ 国内に広められた 5つの視点を教示していった。すなわち、「興味・関心を向けている場面」「集中・熱中している場面」「工夫や挑戦をしている場面」「誰かとコミュニケーションをとっている場面」「自ら責任をとっている場面」である。

NZ の“Learning Stories”には、一般的な書式があるわけではない。Margaret Carr らが当初保育者のワークショップ指導において、「自分たちに合ったアセスメントの書式を作り出す」ことを提案している。開発者の一人である Wendy Lee 等と共にアセスメント書式は実践者と共に改善しながら構成されていく独特の方法である。当初は、「学びの構え

図1 執筆提案の書式

（ ）さんの学びの物語づくり  
Learning Stories (養育者・保護者用)

写真を貼ってください。  
写真がなくても、活動のざらめめから写真を3枚ほど用意してください。  
内容は3枚で結構です。

学びのアセスメント

活動の場面など、子どもの活動、子どもの行動など状況が分かるように、具体的に書いてください。

（ママからのコメント）  
発達しているな、学んでいるなと思った点を、書いてください。

図2 第一回のワークショップの様子



(前掲した5つのポイント)」の5領域が書かれたシンプルなA4用紙1枚を使用していた。

我が国の保護者には、自分たちで書式を作り上げる時間や場面无いことを勘案し、筆者開発の「1枚の写真で語る子どもの学びの物語」(図1)を使用することを提案した。

#### (4) 第2回ワークショップ

##### 1) 1枚の写真で物語る“Learning Stories”のフィードバック

第2回目のワークショップは、第1回目の課題を持参して、筆者からのフィードバックを受けることから始めた。(図3, 4)

参加者の全てが、発達評価としての記録経験がないため、「どう書いたら良いか分からない」「宿題がストレスになる」などと否定的な意見を感想として述べている。しかし全員が「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」を持参してきた。一人一人へのフィードバックは、子育て相談の様に対面型で行われ、保護者の表情を読み取りながら進めた。(図3, 図4)

保護者Aは、誰でも一度は通過する「一人でスプーンを使い始める瞬間」を課題テーマとして取り上げている。この日が訪れるのを心待ちにしていた母親は、実はこの時こそ、我が子自身が待ち望んでいた自立の瞬間であることに気づき、子ども自身の達成感を実感した場面だとしている。この時の母親へのフィードバックでは、「いつもなら、つい親が手を出してしまうが、これが子どもの自立していく瞬間だろうと思い、まずは見守った」という保護者の姿勢における微妙な変化が現れたことを確認でき、「子どもの発達観」に対する変化が生まれた瞬間として評価できると思われる。(図5)

保護者Bは、最初風船を「膨らませて!」と何時もママに頼むばかりだったが、ママの膨らませる様子を(本人が)じっと観察して、独力で挑戦したワンシーンを、「子どもの成長した瞬間」として捉え作成している。フィードバックでは、「子どもが大人の行動をじっと観察して成長することを実感した」と感動体験を語り、自分自身の子ども観の変化を伝えてきた。(図6)まさに、「1枚の写真で物語る“Learning Stories”」の記録効果と言えよう。

10人のそれぞれの母親からは、子どもの些細な行動が、実は発達のワンシーンであることを認識したとするコメントが得られ、1枚の写真で子どもの成長を実感するタイミングや場面の存在を認めることに共感し、それを発見することを楽しむ様子が見て取れた。



図3



図4

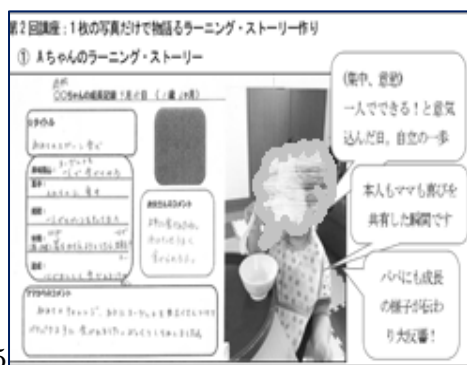


図 5

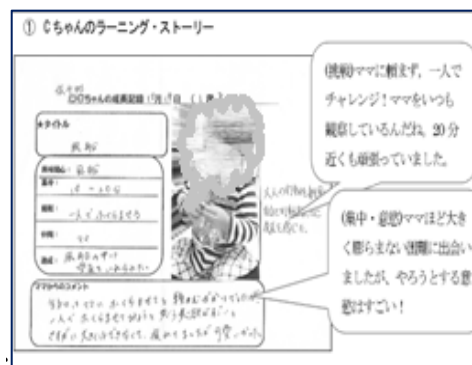


図 6

## 2) 成長のプロセスを意識した我が子の学びの物語のモデル提供

NZ の Play Centre 母親グループにとっても、“Learning Stories”を書くのは大変難しい作業である（2016年児童学会研究大会発表）。特に子どもの成長を、見える結果よりも行為における意味（プロセスにある意味）の理解に重点を置くからである。

筆者は、1枚の写真による“Learning Stories”のフィードバックを済ませ、その後段で参加する母親たちに成長のプロセスを意識した複数の写真で記録する方法（筆者は3～4枚の写真を推奨している）を提案し、演習を行った。

図7、8は筆者作成の「成長のプロセスを意識した我が子の学びの物語」である。



図 7

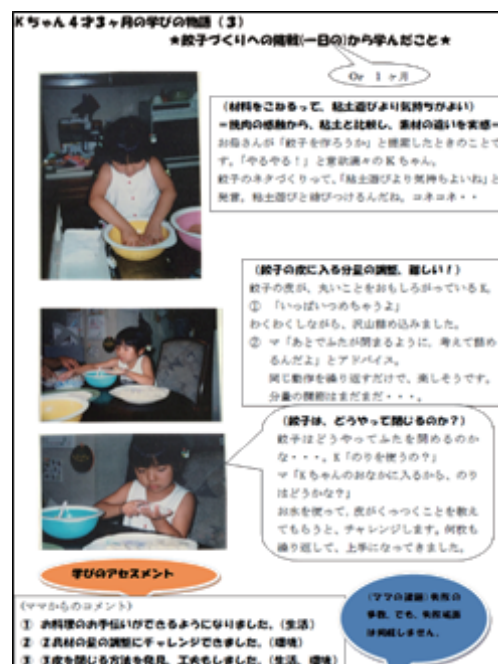


図 8

参加した母親たちは事例を示すと、数枚の写真を撮ることで「子どもの発達プロセスの中で見てくること」に気づき始め、時間や経過を追って子どもの様子を観察すること

に興味を持ち始めた。1枚の写真で語る子どもの“Learning Stories”は、比較的挑戦しやすい様であったが、成長のプロセスを意識した“Learning Stories”は、「私にできるかしら」と不安の声も上がっていたことは否めなかった。この演習後に概ね1ヶ月の期間を設定し、この期間に“One Story”を作成することを課題とした。

### (5) 第3回ワークショップ

#### 1) 成長のプロセスを意識した“Learning Stories”のフィードバック

第3回目は、第2回目の宿題であった「成長のプロセスを意識した複数の写真で記録する方法、すなわち成長のプロセスを意識した“Learning Stories”」の課題に対するフィードバックからスタートした。1枚の写真による記録以上に、いわば、ストーリーを作成する上で、場面を掬い上げるのが非常に難しいのは容易に想像できる。成長をプロセスで記録するのは、保育者のように発達評価に慣れている専門家でも難しいからである。

母親たちの中には、子どもの健康上の理由を挙げ、「写真が撮れない、記録をまとめられないので時間が欲しい」と訴えてきた人もいたが、10人中8人は、期間内にこの課題を持参してフィードバックを受けた。(残りの2人も時間を置き達成している。)

保護者Cは、お祭りの的当てに興味を持ったお子さんが、一人での的当てに挑戦する様子を捉えている。4枚の写真からは「最初は友達が挑戦する様子を観察していること。失敗はするものの、あきらめずに自分なりの工夫を凝らして再挑戦する様子を捉えていること。その日は結果的には失敗に終わるが、結果を気にするより達成感と自信に溢れる様子を確信していること」が記されている。子どもが興味を持ち、それに向かって挑戦したり工夫をする様子に成長を感じたり、結果にとらわれずに子どもが生き生きとしている様子を実感するなど、今までと違った娘の発達の側面に触れ、それを喜ぶ保護者の共感的姿勢が伝わってきた。(図9)

保護者Dは、1歳5ヶ月の子どもD君の発達について、意外な場所で実感したシーンを捉えている。D君の姉が通う幼稚園での移動水族館での出来事である。初めて出会う海の生き物と対面したD君は、最初は大変怖がっていた。不安から逃げようとするD君だったのが、ある一人の女兒が大胆にも臆せず亀に餌を与えている様子に刺激され、自らも餌やり挑戦したという。恐怖を乗り越え、好奇心が勝った瞬間を、父親と母親はD君の成長を実感したと言うことである。そのプロセスが、見事に記録として表現されていた。保護者が、D君の見えない心の中の不安や葛藤と、好奇心とのせめぎ合いに気づい



図9



図10



た深い考察も付記されていることは、実に興味深い。(図10)

## 2) ワークショップ 3 回を経た保護者とのフィードバックを終えて

NZ の保護者の事例を基礎に、6 月から 9 月までのおよそ 3 ヶ月間にわたる「日本版 “Learning Stories”」の取り組みは専門的トレーニングを受けてない保護者にとって、大いなる挑戦であったと思われる。ワークショップを通じて学びながら書き上げることの価値を見だし、子どもの発達を対象化すること、客観的に可視的に観て評価することの大切さを実感している様子が見られた。

今回のアクションリサーチは、3 つのステップで実施されたことに大きな特徴がある。一つ目は子どもの発達を対象化し可視化し、成長をプロセスで観ることの意義を理解するという目的を持つこと。二つ目はモデル開発したフォーマットを使用しながら、自分の子どもの具体的な成長を書くこと。三つめは、書いたものに対して、専門的フィードバックを受け、子どもの発達する姿に共感的姿勢を抱き、自分の子育てに対する姿勢に肯定感(自信)を持つことである。

3 回のアクションリサーチを経て、10 人の母親たちからは、次のような肯定的なインタビュー結果が得られた。(可能な限り発話に忠実に表記している)

- ・育児に追われる中でも、子どもは遊んだり、活動する中でいろいろな体験をして、それが成長へと繋がっていることが分かった。
- ・子どもの行動の意味を振り返り、コメントを記入したら、些細なことだと今まで思っていたことが、実は子どもが発達している証しだと分かった。
- ・大人から観て何でもないことが、子どもにとってはとても大きなことだと分かった。
- ・「記録」を書くことはとても面倒なことだと思ったが、書いたら子どものことが分かるようになった気持ちがした。
- ・子どもの兄弟関係や父親との関係にも目を向ける良い機会となった。
- ・子どもの成長をプロセスで捉えるという意味が少し分かった。目の前のことだけで判断するより、長い目で見なければならないことに気づいた。結果を焦る必要がないことも分かった。
- ・主人に記録を見せることで、主人の幼い頃の話聞くことができた。そのことで子どものことを話し合うきっかけになった。
- ・“Learning Stories”を観て、子どものことがわかりやすくなった。主人から普段の様子が分かって良かったと言われた。
- ・書くうちに、子どもともっと向き合う時間を習慣的に持とうと思った。
- ・幼稚園の先生から子どもの様子や話を聞くことが楽しくなった。

## (6) アクションリサーチに関する考察(保護者版)

日本版 “Learning Stories” のモデル開発を行い、それを進めるアクションリサーチを実際に進めることは、仮説を通してより良い結果を得るための研究である。そのため、否定的な結果が出ないように、事前の準備を徹底すると共に、フィードバックに注視した結果、保護者の子どもに対する発達観を変化させ、子育て不安を軽減させる効果は概ね達成されたと思われる。子どもを育てる行為において、「喜び」と「不安や戸惑い」は表裏一体であるが、評価の観点を変えるだけで、無意味な不安を増大させることに歯止めをかけ、「喜び」に転じることの可能性を示すことができたのではないだろうか。

Wendy Lee が、“Change the word、Change the world”と述べているように、どのような言葉で子どもの姿を伝えるか、発達を伝えるか次第で、その子どもを取り巻く世界（環境）は変わる。子どもの生活や遊びの世界に存在する価値を、大人の偏った評価で歪めてはならない。殊更、親という身近で影響力の強い存在者のそれは、子どもの人生をも左右する。それだけに、子どもの発達を適正に評価する姿勢を身につけることの重要性は保護者にこそ重要である。このアクションリサーチを通して、保護者に身につけるべく適正な発達観を形成できたという意味で、研究の成果として実証されたと言えよう。

### 3. 我が国の保育者を対象としたアクションリサーチの結果

#### （１）モデル開発（保育者版）の経過－「園の特色を生かして」－

本研究は、佐藤等を中心とした保育現場の園長との共同研究でもある。このアクションリサーチを行う中で、“Learning Stories”の理論的枠組みを研究しながら、実際の幼児教育に生かすための書式を模索し、各々が創意工夫の上作り上げて実践してきた。

たとえば、共同研究者である森本は、「子どもの育ちの“見える化”をめざした取り組み」として、幼稚園でのアクションリサーチのポイントを次のようにまとめている。

- ①全職員がカメラを持ち瞬時に撮影
- ②本園の教育に繋がる視点を意識する、「湧き出る探究心、弾む身体、仲間という・仲間となる楽しさ」を捉える
- ③保育後の「見て見て！今日の嬉しいフォトタイム」の実現。各保育者が撮った写真を印刷し、職員の前でポイントを語る。何故嬉しい場面と思ったか、子どもの内面で育っているものは何か、今後の保育者の援助は何かを踏まえる。
- ④1枚の写真を有効に活用する。
- ⑤園内研修で読み取り学びを深める。

現在も幼稚園の職員全体で、子どもの発達評価の指標としての“Learning Stories”の実践研究を進めている途中である。

#### （２）ヴィジブルな保育記録（保育者版）の書式提案

佐藤は、Margaret Carr の“Revisting”による「子どもの発達の価値の再訪問」に注目している。「保育記録は書き残すことが重要なのではなく、その記録を子どもが見て、保護者が見て、保育者が再び書いた記録を見る（Revisiting）することにより、こどもに「あなたって素敵ね」と、その子どもの価値を認め、力づけ、勇気づけることが大事だ」という視点である。これが重要なのは、子ども自身が価値ある存在であること、自分なり努力している存在、学びつつある存在、学び手としての自己意識を育てることに他ならないからであると指摘する。さらに子どもの素敵を捉える視点として、NZ 研究が示す5つの学びの構え（disposition）を応用し、亀ヶ谷（宮前幼稚園）・土井（南大野幼稚園）・坂本（RISSHO KIDS きらり）らの実践例を基にヴィジブルな保育記録のフォーマット例を作成した。（小泉・佐藤2017）（図11、12参照）

図11 子どもの素敵を1枚の写真で捉える

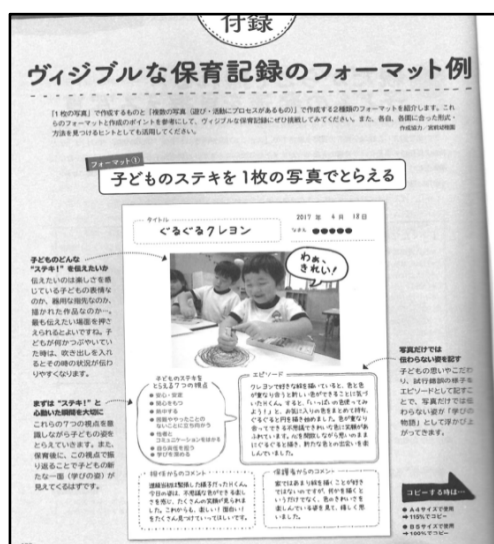


図12 プロセス（複数の写真で）捉える



### (3) 保育現場でのアクションリサーチの現状と課題

筆者等の日本版“**Learning Stories**”（保育者版・保護者版）のモデル開発は、本研究で一定の成果を上げることができたが、実際の活用については、まだまだ課題は山積である。保育者版で言えば、従来型の記録との比較において、ヴィジブルな記録を作成する保育者側のスキルの問題が指摘される。

たとえば写真を撮影する点において、①誰が撮るのか、撮れるのかという問題である。保育は、保育者の直接的な援助・指導によって営まれる行為が中心である。子どもと保育者が心と身体を直接向き合わせる行為とも言えるが、「写真を介在する記録は、当時者である保育者が撮影するには、子どもとの物理的・心理的距離を中断させることにもなりかねない」という懸念が払拭できない現状にある。当事者以外の保育者（園長・主任）が撮るのであれば、振り返りの当事者の視点と異なる場合も噴出する。この問題は大きい。

②どんな場면을撮るのかという問題もある。NZの“Learning Stories”を記録する視点は「5の学びの構え」であるが、日本の保育者の発達を捉える視点は必ずしも合致しない。とりわけ、低年齢児においては評価の観点が異なることは否めないだろう。一つの形式で全て記録できるわけではない。年齢に応じた書式も検討するべきだろう。また、「就学前に育てたい10の姿」をどのように見据え評価していくかも、現場の課題として大きい。

③誰とシェアするのかという問題もある。NZでは、子ども・保護者・保育者の3者を繋ぐものとしての価値が大きい。とりわけ子どもが見る視点にも配慮されている。しかし日本では、保育者間、あるいは小学校との連携において教育的連携を営むための資料として活用できることが優先される。我が国は、子どもの情報に関する守秘義務が焦点化されるため、ここにおいて、誰とどんな情報を共有するのかという観点を、更に吟味しなければならないだろう。

④書いた後の活用を実用化するための体制作り、たとえば、園内研修での定例化を徹底するための教員体制を整備することが急務である。また、記録作成のための物理的環境

(ノンコンタクトルームの設置、ノンコンタクトタイムの設置、記録作りのハード環境)の整備もまた現実的な課題であろう。

筆者等は初めて NZ の保育改革の実態に触れた2014年以来、5年間の継続的な実地調査を経て、我が国の保育者が、子どもの生活や遊びを通して学ぶ姿を的確に可視化し、日々の保育改善に役立てることのできる日本版“**Learning Stories**”のモデル開発を行い、現場で汎用性の高いものとなるようアクションリサーチを行ってきた。

OECD の新調査“**Starting Strong Survey : 2015-2020**”でも、ますます保育プロセスの質に注目している。OECD-E2030プロジェクト第1フェーズでは、「成長の意味を再定義している」とし、「経済成長から包括的成長へ」「個人から個人及び社会全体の豊かな暮らしを視野に入れる」という動向が報告されている。時代と共に、幼児に求められるキーコンピテンシーも変化する可能性も散見される。

私たちの幼児教育に関する研究は、不易と流行の役割を検討し、これからも社会の変化と共に子どもの将来を見据えながら進めなければならないと痛感しているところである。

(小泉 裕子)

#### (引用・参考文献)

1. 佐藤康富・原孝成・小泉裕子・大野和男・森本壽子・上田陽子：「幼児の学びをアセスメントするための指標構築に関する研究」、2017、鎌倉女子大学学術研究所報第17巻, pp47-56
2. 小泉裕子・佐藤康富編著：『ヴィジブルな保育記録のススメ』、すずき出版、2017
3. 泉千勢・一見真里子・汐見稔幸編著：『世界の幼児教育・保育改革と学力』、明石書店、2014第4版
4. 七木田敦・ジュディス・ダンカン編著：『子育て先進国 ニュージーランドの保育』、福村出版、2015
5. 田熊美保：『21世紀カリキュラムとプロセスの質を考える』、2018、公開シンポジウム「豊かな人生を紡ぐ保育～Society5.0 保育から社会を変える～」の講演資料より
6. マーガレット・カー（大宮勇雄・鈴木佐喜子訳）：『保育の場で子どもの学びをアセスメントする-学びの物語アプローチの理論と実践-』、2013、ひとなる書房